FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

平成 24 年度特別展

2012.3.14 No.44

玩具の100年　玩具でたどる明治・大正・昭和

日本では、とくに江戸時代の後半から商品としての玩具の開発・販売がさかんになり、子どもたちを夢中にさせてきました。そうした玩具には、芝居や時事ネタなどの流行の風俗が取り込まれただけでなく、時代の最先端の素材や技術もいち早く取り入れられ、工夫が凝らされました。

この特別展では、江戸時代の末期を皮きりに、明治時代、大正・昭和初期、昭和戦中・戦後期、そして高度経済成長期まで、時代を追って玩具を紹介していきます。この約100年間、それは大きく日本の社会が変化した時期とえいます。玩具の題材、種類、素材を通して、子どもたちを取り巻く状況が移り変わるようすを感じとっていただければと思います。

一、江戸時代の玩具「玩具絵」を中心に

「玩具」と書いて「おもちゃ」と読む･･･現在では当たり前です。しかし、遊び道具類は、古くは「手もとで遊ぶための道具」という意味で「持ち遊び」と呼ばれていました。これがなまり、さらに丁寧になって「おもちゃ」になったとされます。この呼び名が「玩具」という漢語とともに広められたのは明治時代以降のことです。それに先立つ江戸時代半ばごろの、子どもたちの身近な玩具のひとつが「玩具絵」(子ども向け浮世絵版画) でした。当時、木版多色摺りの技術が発達し、人気のある役者や芝居などを題材にした色鮮やかな浮世絵版画が大人たちの娯楽として広まっていました。同様に、子ども向けにも、いわばカラー図鑑のような「○○尽くし」絵や、組み立てて遊ぶ「組上げ絵」などの「玩具絵」が数多く出板されていました。

そうした玩具絵や組上げ絵を中心に、江戸の子どもたちの遊びをご紹介します。

二、文明開化と子どもたち

江戸から明治へと大きく時代が動いたこのころ、玩具の世界もその変化を積極的に取り入れていきます。たとえば玩具絵に「西洋文化」を題材としたものが現れます。江戸時代からつづく技術によって、新しい題材が子どもたちに発信されたのです。やがて、明治時代末期にブリキ(鉄に錫をメッキした素材) が国産化され、ブリキ製の玩具類が本格的に作られるようになりました。とはいえ、まだブリキ表面に直接印刷できなかったため、彩色は手で行われていました。

ここでは、文明開化に関わるアルファベットを図案化した玩具絵や、洋装の子ども絵、さらに明治期の貴重なブリキ玩具なども展示します。

軍艦「鹿島」
明治時代末期
兵庫県立歴史博物館 蔵
(入江コレクション)

三、大正・昭和初期の「児童文化」と玩具

大正から昭和初期にかけて、社会の安定と経済成長が進みます。そうしたなか、子どもたちに向けて、発達段階に合わせた玩具類が導入されたり、文学者たちによる「児童文学」が提唱されたりしました。セルロイド製の玩具が流行し、日本製玩具は世界市場でも知られるようになりました。児童雑誌を含め、当時のすぐれた玩具を紹介します。

四、戦争と玩具

昭和6年 (1931) の満州事変、12年の日中戦争の本格化と社会が戦争へと傾斜するなか、子どもたちの世界にも戦争の影がいっそう濃くなります。このころの玩具には兵隊や武器・兵器のモチーフが多く見られ、雑誌類にも戦争関連の物語や記事が目につきます。そして、昭和13年に国家総動員法が施行され、物資や生産手段が戦争遂行に集中されたことで、金属やゴムなどの素材は玩具に使えなくなり、陶磁器や紙、木などの代用素材が用いられました。

ここでは、戦争や銃後のくらしを題材とした玩具を中心に展示します。

幻灯機
昭和20年代 当館 蔵

廃物利用品

五、戦後の玩具

第二次世界大戦後の占領期には、占領軍の廃棄物（空きカンなど）や古紙（書類など）を利用した玩具が作られました。ブリキの缶を伸ばして作られたジープや、書類を再利用して台にしたままごと道具などが、少しずつ子どもたちを笑顔にしていきます。昭和 22 年（1947）からは玩具の輸出が再開され、占領下の日本製（Made in Occupied Japan）と記された玩具がふたたび世界市場に出回りました。

昭和30年代に入ると、精緻な作りの日本製玩具（ブリキ製玩具、電池で動く動物玩具など）は高く評価され、欧米諸国にさかんに輸出されました。高度経済成長期には国内の購買力も向上し、さまざまな玩具が日本の子どもたちの手にわたるようになります。昭和40年代にはプラスティックや合金などの新素材、50年代にはテレビゲームなどの新技術が相次いで玩具に導入されます。また、急速に普及したテレビ、月刊から週刊へと移り変わった漫画雑誌などから人気キャラクターを採用した玩具も登場します。

ここでは、戦後すぐの占領期の玩具から、30年代以降のキャラクター玩具やぬり絵、絵本などを展示します。あわせて、昭和30年代後半から40年代、福井の子どもたちのあこがれの的であった「だるまや屋上遊園地」についてもご紹介します。

（瓜生由起）

「だるまや」屋上遊園地
昭和31年（1956）

企画展 **玩具の100年** 玩具でたどる明治・大正・昭和

平成 24 年 7 月 21 日～9 月 2 日

観覧料：一般 400 円　大学・高校生 300 円　小中学生 200 円　70 歳以上の方 200 円

館蔵品紹介

福井江戸往還図屏風

法量：高 174× 幅 368(cm)

本資料は、福井から江戸までの街道にある町や村、周囲の山々や河川・橋などを絵画風に描いた六曲一双の屏風です。

左隻は福井から北国街道の木ノ本を経て、東海道の熱田から舞阪までの道中や、清州を経て垂井に至る美濃街道や関ヶ原などの中山道の一部も描かれています。いっぽうの右隻は東海道の浜松から小田原を経て江戸日本橋に至る道中が描かれています。それぞれの街道には、金地色の紙に宿駅名を墨書した付箋が貼られています。

左隻の第 1 扇から第 6 扇にかけて、北陸道の宿駅である板取・今庄・湯尾・脇本・今宿・府中・鯖江・水落・浅水・福井や街道沿いの風景が描かれています。なかでも第 4 扇から第 6 扇にかけて、福井城下を詳細に描写した部分があります。足羽川にかかる九十九橋を中心に左側に城下、右側に商家が立ち並ぶ久保町が描かれています。橋上では武士や町人などが、橋下では川舟が往来し、投網で川漁をする姿もみられます。また、橋下の荷揚げ場で荷の積み下ろしがおこなわれているようすも描かれています。左側の九十九橋北詰には照手門と高札場があり、その向かいには福井藩札の札元を勤め酒造業を営んでいた荒木家の一部がみえます。そのほか武家屋敷や福井城の櫓、足羽川の毛屋の繰舟の渡し場の河戸が描かれています。橋の右側には、鬢付屋で知られる大黒屋をはじめとする商家が立ち並び、通りを往来する大勢の人びとが描かれています。

このような江戸時代の福井城下をビジュアルに描いた絵画資料は、当館が所蔵する「馬威図屏風」や越前松平家の資料の「福井城下眺望図」（福井市郷土歴史博物館保管）など数例に過ぎません。そうした意味では、当時の福井城下の様相を具体的に知ることのできる貴重な資料といえます。

実はこの屏風と構図がたいへんよく似たものがあります。個人所蔵の「江戸福井道中図屏風」です。この屏風も福井城下から江戸までの道中を描いていますが、北陸道部分は左隻の第 4 扇から第 6 扇に集中して描かれています。福井城下部分についてはほぼ同じように九十九橋を中心にして北側と南側が描かれています。福井城下部分が両者とも実景を反映して描かれていることから、地元の絵師の手によるものとも考えられます。

ところで、当館所蔵のこの屏風は、全体に汚れや色焼けが目立っています。そのため、デジタル画像処理を行い、原本(もともとの姿)に近い色合いの複製品を製作しました。

現在、常設の「歴史ゾーン」で展示しています。福井城下部分以外にも興味深い描写がありますので、じっくりとご覧いただきたいと思います。

（山形裕之）

城下部分

左 隻

館蔵品紹介

ヴァルトゼーミュラー　アジア図

法量：縦 36.6× 横 51.0(cm)

本図は、ドイツの地理学者であるマルティン・ヴァルトゼーミュラー（Martin Waldseemüller・1470-1521年）が制作した『インドシナ半島と大韃靼図』であり、1522 年にストラスブール（現フランス）において出版されたものです。大きさは、縦 36.6cm× 横 51.0cm を測り、木版により印刷されています。

本図の大きな特徴の一つは台形を呈した地図の形にありますが、これはヴァルトゼーミュラーが２世紀に編纂された『プトレマイオス世界図』を参考としながら、本図を作成したことを示しています。

『プトレマイオス世界図』の段階では、西欧人の間で知られていた世界の東端はインドシナ半島であり、それよりも東側の世界（現在の東アジア）は未知の世界でした。そのためヴァルトゼーミュラーは13世紀にシルクロードを通り中国を旅行したマルコ・ポーロによる情報を基に、韃靼（現在のモンゴルを中心とした地域）や日本の情報を追加し、当時としては最新の知識を反映した本図を作成しています。

本図で右下に細く縦長に描かれ「ZIPANGRI」と書き込まれた島が日本であり、小さな文字で書かれた注記には「ジパングは、東方、大陸から1500マイルの大洋中にある。はなはだ大きな島である」と記されています。この描かれた日本の位置を現在の地図に投影すると北マリアナ諸島付近に位置するため、ヴァルトゼーミュラーがマルコ・ポーロによる情報のみを根拠として、そのまま図化したことがわかります。

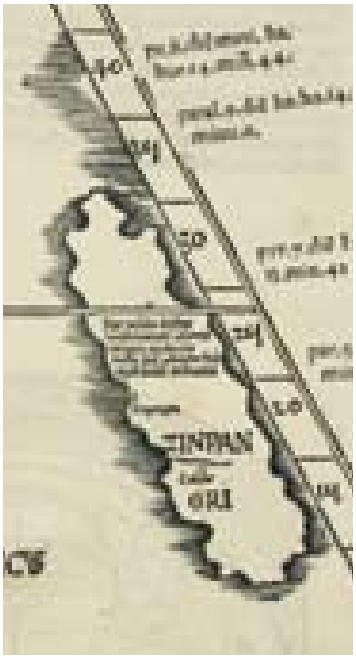
本図が描かれた頃の日本は、強烈な個性を持った戦国大名たちが覇権を争った戦国時代の前半（16 世紀前葉）に当たります。この時代、越前は一乗谷朝倉氏四代当主である孝景の時代であり、1525年（大永５）には朝倉宗滴が近江に出兵し、1527 年（大永７）には孝景軍が京都西院口で合戦をおこなっています。また、前世紀からの一向一揆はその厳しさを増し、1531年（享禄４）には孝景が加賀一向一揆に介入するなど、朝倉氏も戦国時代の波に揉まれていました。

戦国時代を考えるとき、私たちは、日本という狭い範囲の中での出来事や歴史観に終始してしまいがちですが、本図を題材に西欧人的な視点から見ると、いかに日本が西欧から途絶された世界の東端の地であったことが理解できると思います。彼等は未だ自分達の目で日本を確認した事は無く、中国で得た情報により「海の向こうに日本と言う国がある」という程度の認識だったのです。

この後、西欧人が日本を実際に確認するのは、戦国時代も後半に入った16世紀中葉まで待たなければなりませんでした。

（水村伸行）

ヴァルトゼーミュラー　アジア図



日本（部分拡大）

館蔵品紹介

高田義久撮影・まつり写真資料

本資料は、写真のネガフィルムです。本数にして224本、コマ数では5853枚にのぼるものです。この資料は福井新聞社の記者であった高田義久氏が撮影したもので、昭和39年（1964）～61年（1986）の22年間に撮られた行事が記録されています。年間を通じての様々な行事、県下で行われている約100種類が撮影されています。最も古いものは昭和39年2月15日の池田町水海の田楽・能舞のものです。いわゆる古写真などと比べると随分と新しいものですが、この6000枚近くの写真には、既に廃絶となった行事や、行事そのものはあるけれども、現在は行っていないことなども含まれており、貴重な資料となっています。

敦賀市刀根には「ミヤアゲ」や「霜月祭り」と呼ばれる行事があり、現在でも行われています。この行事では、餅つき歌を歌いながら千本杵で小豆餅と白餅を搗きます。この餅をついている時には見物人にも餅をおすそ分けします。現在は餅をついているそばにいる見物人に、というくらいです。しかし、かつての餅つきの際には、餅を杵につけたまま、村の中を走り回っていたと言われています。写真はその当時の様子が窺えます。

また、福井市千合町江文神社には「向山神事」という廃絶した祭りがあります。この祭りは、前半部に0歳児の氏子の加入の式や数え年5歳男児の座の加入の式が行われ、後半部では藁で大蛇を作って、途中、男女が集まって踊り、その後、大蛇を引きちぎって壊すというものがあり、大きく分けて三つのことがある行事です。これも氏子の加入の式から、大蛇を壊すまでの祭り当日の流れがわかる記録になっています。

他にも、敦賀市奥麻生の「メシクイマツリ（めし食い祭り）」という、当番となった家で、直会に山盛りにした飯を食べる行事があります。山盛り飯は3合分の白飯を押しつめたもので、この山盛りにした飯を食べる様子からこの名称が付いています。これも廃絶しており、山盛り飯、汁物などが置かれたお膳の様子などは見られないものとなりました。

このように、今ではもう話で聞くことしかできない当時の様子が、よりわかりやすくなります。祭りというものは、変わらないようでいて少しずつ形を変えることがあります。日程が変わったり、その当時にあったものが無くなったり、逆に加えられたりします。写真はそのように変わったものをわかりやすく記録しているものでもあります。

そして、祭りの写真は祭りそのものの記録としてだけでなく、その当時の人々のくらし、衣服の様子や家の外見、屋内の家具の配置、火鉢などの暖房具などが分かる生活の記録ともなっています。

最近では写真だけでなく、映像も多く残されるようになってきました。普段の日というよりも、行事のある日、ハレの日に撮影されたものが多いかと思います。こうした行事などのほか、家や集落の景観などの様子が分かる古い写真、映像がございましたら、博物館までご連絡ください。

（川波久志）

ミヤアゲ

向山神事

メシクイマツリ

研究ノート

越前の定朝様仏像　中手樺八幡神社阿弥陀如来坐像を例として

6世紀に日本に伝来して以降、国家や一部の有力者のものであった仏教は、平安時代に入ると地方にも浸透し、造像活動が盛んになります。特に素材として「木」に重点が置かれたことは、得やすさと木に対する特別な信仰も相まって、造像活動に重要な意味を持ったと思われます。平安時代前半の木彫仏、とりわけ地方仏では非常に個性的なものが多くみられますが、平安時代後半になると地方でも都風の仏像様式が流行し、没個性化します。この都風の様式を「定朝様（じょうちょうよう）」といい、全国各地で拝することができます。ここではこの定朝様阿弥陀仏像の一例として23年度秋に展示した福井市（旧美山町）中手の樺八幡神社の阿弥陀如来坐像についてみてゆきたいと思います。

一、定朝様とは？

仏師定朝が平安時代中期に完成させた仏像の様式をいいます。天喜元年（1053）に完成させた京都平等院鳳凰堂の中尊阿弥陀如来坐像が定朝の作例として知られ、12世紀にかけ大流行しました。その姿は円満の一言に尽きるでしょう。ふっくらと満月のようお顔、半眼の目もやさしく、鼻・口も小さく整っています。肩は撫で肩で丸く、豊満な胸や腹も決して怠惰に緩んだものではなく、締まるべき所は締まり優雅な体躯をみせています。そのからだを包む衣はまるで薄絹を纏うように体にぴったりとフィットし、衣の皺も浅く曲線が緩やかに拡がってゆきます。このように静かで優美な姿は当時国を治めていた皇族・貴族達の美意識に叶い、「仏の本様（ほんよう）」と讃えられました。そして定朝一門に注文、あるいは定朝仏が模刻されるようになりました。ちょうど末法の時代に突入したとされる時期、浄土信仰が都から地方へと広まってゆきました。この浄土教の普及と相まって、定朝様は都の貴族のみならず、都の文物にあこがれる地方の有力者達からも求められ、定朝様の仏像は全国的なブームとなりました。北は宮城県平泉の諸寺院や南は大分県国東半島の富貴寺等にまでその広がりを見ることができます。

しかし定朝様の重要性は、外見の特色だけにとどまらず、仏像製作上画期的な「寄木造」技法を完成させたことが見逃せません。この寄木造こそ技術的側面から定朝様ブームを支えたといえるでしょう。

それ以前、平安時代前期の木彫仏の構造は基本的には「一木造」でした。一木造とは仏像の基本部分である頭・体を文字通り1本の木から作り出す技法をいいます。

これに対し寄木造とは頭・体という基本部分を複数の木材を矧ぎ合わせて造る方法です。これにより木芯を外した通常サイズの材木を集めて巨像を造ることが可能となります。また、部材を一端ばらせば内刳りも容易となり、肉厚をとことん薄くすることで干割れの心配も無くなり、軽量化も可能です。さらに、複数材で作られることから、全体を統括する仏師のもと、複数人の仏師がそれぞれの部材を仕上げ、最後に組み立てることができます。こうして分業化・組織化された工房＝「仏所」が成長しました。

都では平安中期以降、丈六等大型仏像の需要が高まりました。これに対し、寄木造によって、用材の確保・軽量化・組織化による工程短縮等の点から需要への対応が可能となりました。

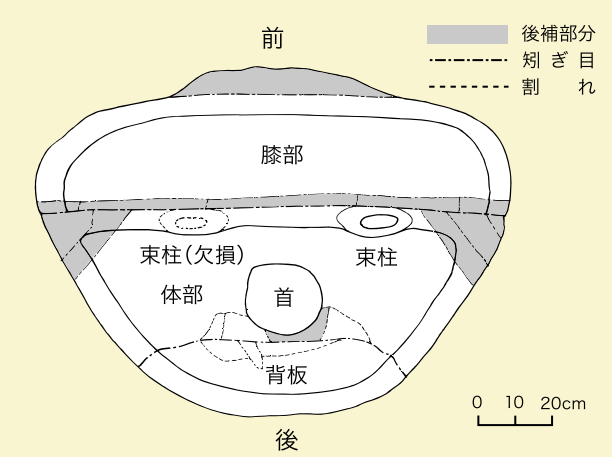
このように定朝様の流行は、像の優美な外見と共に、寄木造という製作技法の完成によって支えられました。

二、中手樺八幡神社阿弥陀如来坐像（写真1）

ここで、越前における定朝様阿弥陀如来像の代表的作例といえる中手樺八幡神社の周丈六阿弥陀如来坐像（福井県指定文化財、以下樺八幡像）についてみてみましょう。形状は、定印を結び、結跏趺坐した瞑想中の姿です。優しい顔つきや彫りが浅くゆったりとした衣文はまさに定朝様の典型といえるでしょう。ただし、鳳凰堂像に比べ体部に対し頭部の比率が少々大きい頭でっかちです。やや形式化しつつある衣文の流れや稜の鎬が弱い等の作風から12世紀中頃の作品と考えます。

構造についてみると、頭体幹部から左腕および右肩に掛る衣、さらに大腿部まで一材で作ります。体部は首後ろで板状に割り矧ぎ、頭部も後ろで板状に割り矧ぎます。膝は横一材を矧ぎ、両手・両肘を別材矧ぎとします（註1）。製作途上、背面で一度割り放し、内刳り後接合しますが、頭体幹部を1材から刻出する構造です。つまり、樺八幡像は、製作技法の上では定朝様以前の一木造ということになります。特に、別材で作られることの多い左右肩材や大腿部三角材が、頭体部材と共木であることから、原木は相当太い巨木であったとみられ、一木へのこだわりを感じます。

また、樺八幡像は向かって左に首を傾げています。これは、大像ゆえ制作者の目が全体に届かず結果的に歪んだ状態で完成させてしまったと思われます。首に鑿を入れ頭体別々に彫刻し、再び鑿を入れた部分で接合する（割首）技法なら傾げた首の角度修正がおこなえたはずですがそのままで完成させています。このように大像にも関わらず一木造であることや、頭部がやや大きくバランスを欠いていることも含め、定朝様以前の造像法の影響を考えることができます（註 2）。しかし、徹底した内刳りにより肉厚が非常に薄いことから古い作り方にこだわったわけではなく、寄木造の理念をよく理解していたとも考えられます。このように旧来（在地）と最新の造像法が並行しているように感じられます。ただし地方では都ほど量産体制をとる必要がなかったことから大像であっても分業に適する複数材とせず、1 人の作者がゆっくり手がけても不都合がなく、従来から慣れた一木造で作られたとも想像されます。



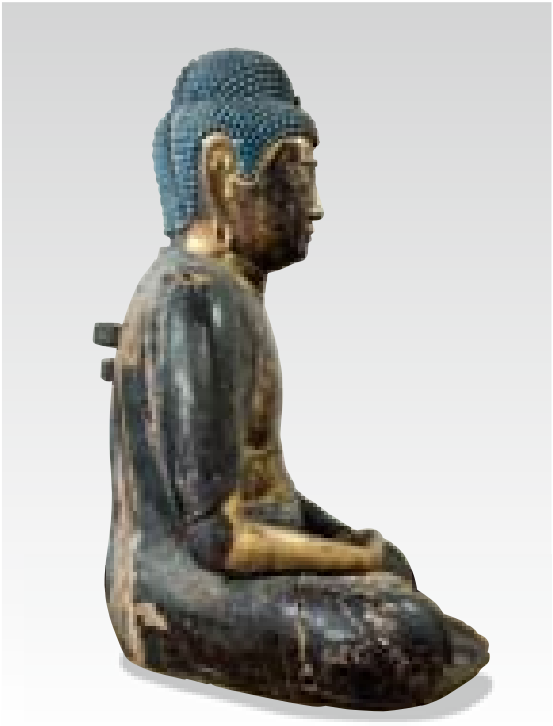
※底部には底板が貼られており、みることができないため、外寸や部分写真から推定作図
県文　中手樺八幡神社 蔵　阿弥陀如来坐像（底部）

像底構造模式図（底板貼りのため推定含む）

三、定朝様の伝播ルート

以上、樺八幡像について、像の姿や構造から、都での流行を受けて越前で作られた像と推定しました。では、浄土教や定朝様のような最新の信仰や仏像はどのよう越前に伝わったのでしょうか。まず、本像が伝わる中手樺八幡神社の別当寺について、中世には平泉寺内（又は末寺）の明王院であったとされます。平泉寺は平安末期には延暦寺に属していました。このことから樺八幡神社も天台宗の傘下にあったと考えられます。特に樺八幡像は定印の阿弥陀如来であり、天台浄土教の影響による造像とみられます。本像を祀る「古拝殿」は、本来、常行堂系阿弥陀堂であったという説もあります。また、越前町八坂神社は定朝様の丈六仏（国重文）を伝えていることで知られています。八坂（祇園）社は天台宗との関係が深く、本社も天台宗の拠点であったと考えられますが、中央作とも見紛う定朝様の丈六仏が複数伝えられていることは注目されます。現在残る定朝様の大像作例が天台宗と関わる社寺に多く伝わることから、天台宗が平安後期の最新仏像＝定朝様を伝え、普及に大きな影響を与えたことが仮定できますが、この件については今後の課題としたいと思います。

写真 1　阿弥陀如来坐像（県文）（正面）



阿弥陀如来坐像（側面）

以上、樺八幡神社阿弥陀如来坐像を例として定朝様の地方への普及について管見しました。樺八幡神社のような社寺は、各地域において都の文化の香りを伝える中心的存在として在地の人びとから讃仰されたであろうことが周丈六阿弥陀如来坐像をはじめ５躯の仏像から想像されます。

中央の流行が地方ではどのように受け入れられ、消化されたかを仏像を通じ今後も調べていきたいと思います。

（河村健史）

註１；大腿部の一部と底板等が後補である。

註２；11世紀後半から12世紀初頭の大像では、鳳凰堂像や浄瑠璃寺阿弥陀堂中尊のように割首としない像も多く見られるが、12世紀には法界寺阿弥陀如来像や万寿寺阿弥陀如来像等にみるように普及する。しかし法金剛院阿弥陀如来像のようにこの時期にも割首としない中央の作例もあり、厳密には割首をしないこと自体を「古様」と断定する要素とはいえない。

参考文献　毛利久「寄木造りの形成」『日本佛教彫刻史の研究』昭和 37 年

博物館日誌（平成 23 年 10 月～24 年 2 月）

10月

- 9 月 30 日（金）～ 12 月 4 日（日）
  「発見！弥生・古墳時代の墓地　中角遺跡の発掘成果より」（オープン収蔵庫）
- 5 日（水）
  福井県立歴史博物館運営協議会
- 8 日（土）～ 11 月 30 日（水）
  写真展「福井国体への道」（エントランスギャラリー）

11月

- 3 日（祝･木）～ 12 月 4 日（日）
  文化財公開展「美山の神仏　ふたつの樺八幡神社より」（特別展示室）
- 20 日（日）
  「神仏と楽しむ茶会」（エントランスロビー）
- 28 日（月）～ 30 日（水）
  「こども文化スクール」（文化課主催事業）

12月

- 2日（金）
  新湊市博物館来館（鉄道関係資料調査）
- 7 日（水）～ 25 日（日）
  クリスマスバルーン・アート＆博物館クイズラリー
- 15 日（木）～1月 22 日（日）
  「辰年の年賀状」（エントランスギャラリー）
- 18 日（日）･24 日（土）
  バルーン福引
  （エントランスロビー）

クリスマスバルーン・アート

1月

- 3 日（火）～2 月 26 日（日）
  冬の収蔵品展「干支の辰＆冬のくらし」（特別展示室）
- 3 日（火）～2 月 26 日（日）
  「冬の遊び　すごろくとカルタ」（オープン収蔵庫）
- 8 日（日）
  雅楽ライブ「辰の響き」（エントランスロビー）
- 15 日（日）
  「辰のお茶会」（エントランスロビー）
  「すごろく体験会」（オープン収蔵庫）
- 26 日（木）
  消防訓練
- 31 日（火）
  滋賀県立安土城考古博物館来館（考古資料調査）

2月

- 4 日（土）～ 3 月 20 日（祝・火）
  写真展「冬のまつり　民俗行事の記録より」
  （エントランスギャラリー）
- 12 日（日）
  「すごろく体験会」（オープン収蔵庫）
- 15 日（水）
  新湊市博物館来館（駅弁掛紙資料調査）

雅楽ライブ

［編集・発行］
福井県立歴史博物館
〒910-0016　福井市大宮 2-19-15　TEL.0776-22-4675(代)
http://www.pref.fukui.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム
No.44　2012.03.14 発行